

講演会

「いま。子どもたちの現状と課題—不登校問題を中心に—」

東京家政大学人文学部心理カウンセリング学科 教授 相馬 誠一



◆◆相馬 誠一先生のプロフィール◆◆

(職歴) 1975年から埼玉県の小・中・高校の教員と大宮市教育相談室の教育相談員を兼務。埼玉県立南教育センター心理相談員。大宮市立教育研究所指導主事教育相談係長。埼玉短期大学講師兼付属教育相談研究所主任研究員、広島国際大学臨床心理学科助教授を経て2003年から現職。

(主な所属学会等)

- ・平成21、22年度 文部科学省「生徒指導提要」執筆委員
- ・平成21年度 内閣府中央企画委員会講師
- ・平成22年度 文部科学省 生徒指導に関する教員研修のあり方研究委員

10年経験者研修講座および倉敷市の先生方を対象とした生徒指導講演会や一般市民の方々を対象としたオープン講座を兼ねて「講演会」を開催しました。



＜問題を抱える子どもたちの課題を明示＞

- 暴力行為、いじめ、不登校の現状を統計的に全国データと比較しながら、その特徴や傾向を具体的に分析することで課題が明確になり、改めて現状の深刻さについて認識することができる。

＜不登校の子どもたちの課題と対策＞

- 不登校の子どもたちの課題（生活習慣の確立、経済的自立、人づきあい、自信の獲得、社会的自立）の対策については、学校の役割や地域での取組などを今一度見直す必要がある。
- 校種別の連携及び関係学校区のネットワークづくりを図っていくことが大切。
- 学級担任のための「不登校児童生徒を出さないためのチェックリスト」、連続する「月3日の欠席」のポイント、抑うつ自己評価尺度、個人支援シート等の資料を用いて、子どもたちへ関わる具体的な対応方法をもっておくこと。

【受講者の感想より】

不登校の子どもたちの現状を幅広いデータや事実のもとに説明してくださり、改めてその定義と現状の深刻さを理解することができました。（保護者）

とても分かりやすく、興味深く聴きました。不登校は社会のゆがみや学校のゆがみがそのまま表れているのだと痛感しました。（保護者）

学校や園での役割や取組、連携の大切さについて、改めて勉強ができました。これまで以上に、連続した欠席を見逃さないように、早期対応や支援を心がけていきたいと思えます。（教員）

「全ての子どもが学業で成功するように支援する。」という言葉が、一番心に残りました。あれこれ言い訳せずに、とにかく子ども一人ひとりに、生きていくための力＝学力を付けていくことをしなければならないと力がわいてきました。今、目の前の子どもの将来を見ずえて、支援していかなければならないことを再認識しました。（教員）



研修風景



異校種間体験・小中連携～15年研・5年研～

15年研では今年も、異校種間体験の研修を行いました。小学校・中学校・特別支援学校の中から、自分の所属とは異なる学校へ出向き、そこで1日体験をしました。また5年研では、今年から小中連携研修を取り入れました。小学校の先生は中学校へ、中学校の先生は小学校へ行き、それぞれ給食から放課後までの時間を参観したり、児童生徒と一緒に活動したりしました。この研修は、支援する児童生徒の過去や将来の姿を重ね合わせられることから、今の自分の立ち位置を知り自分の指導の仕方を見直すよい機会になったようです。

(受講者の感想から)

児童の元気な姿が印象的で、毎日楽しく登校してきている姿が想像できました。担任の先生の細やかでいいいな対応がとても参考になり、自分自身の授業に対する準備や生徒に対する心構えなど、初心にかえって取り組んでいかなければならないと考えさせられました。(小学校を体験した中学校教諭)

半日間ではありましたが、教師があれこれ指示を出さずに、生徒一人ひとりが考え動く姿を見ることができました。しかし、個性が強く現れる時期でもあるし、教師の言葉かけが難しいことも感じました。自主性を重んじていても、目は離さず、細かな変化を感じ取る力が大切だと感じました。(中学校を体験した小学校教諭)

初任者研修講座（会場校をお借りして）



学習指導・特別支援教育・道徳と特別活動・幼小中連携の研修では毎年会場校をお借りし、1日をその学校で過ごして研修をさせていただいています。今年は、倉敷南小学校・北中学校・倉敷支援学校・天城小学校・真備東中学校・葦高幼稚園・連島南小学校で研修をさせていただきました。会場校での研修は、実際に現場の様子を見せていただいたり、体験させていただいたりする中で、実践にすぐに直結する貴重な学びの場となっています。

(受講者の感想から)

「まず」「次に」「最後に」をうまく使うことで、言葉の式ができていたように思います。机間指導の際、一人ひとりの考えを受け止め、「どうしてそうしたの。」と尋ねることで、わけを説明できるように支援されていました。早速取り組んでみたいと思います。(小学校 学習指導の実際)

「笑顔の沈黙」「学校・学級は水槽だ」という校長先生、教頭先生のお話から、教師の生徒を受け入れる雰囲気づくりの大切さを学ぶことができました。「分かってくれる。見ていてくれる。」という安心感を与えることのできる存在に、私もなりたいたと思いました。(中学校 道徳・特別活動の実際)

担任の先生が、「自分のことはできるだけ自分でさせています。」と言われました。どこまでが必要な支援で、どこからがおせっかいになってしまうのかわからず、戸惑いました。しかし学級には視覚支援の工夫がたくさんされており、次にすることや手順がわかり、とてもありがたかったです。担任の先生は、温かくも厳しく子どもたちに接しておられ、そのやりとりはとても勉強になりました。(特別支援教育の実際)

子どもの「なぜ？」をととても大切にしたい授業だなと思いました。「なぜ？」から気付きにもっていき、さらにその気付きを何人かの児童に何度も復唱させていて、これが学力の定着につながっているのだと感じました。これから私も気付きにもっと重点を置いて授業をしていきたいと思いました。(小中の連携について)

幼稚園の先生方は、小学校入学後の子どもたちの戸惑いを少しでも少なくしようと工夫してくださっているとお聞きしました。私たち小学校教諭も、中学校入学後のことを見通して指導していくことの大切さを感じました。(幼小の連携について)

「輝く君に会えたよ！」

ふれあい文化祭

～展示・ステージ発表～

倉敷ふれあい教室では、5教室（分室）合同で体験活動を行っています。7月には由加山にある倉敷市少年自然の家での宿泊自然学習、10月には球技大会（ソフトバレーボール大会と卓球）を実施しました。子どもたちは、これらの活動に取り組む中で、教室の仲間と協力することの大切さややり遂げた喜びを感じ、自信をもつとともに、他の教室の仲間とふれあって人間関係を広げるなど、多くの収穫を得て成長しています。12月8日（金）には、1年間の集大成ともいえるふれあい文化祭を行いました。会場後方に各教室の活動の中で作り上げた作品を展示し、ステージの部では、カー杯発表を行いました。この文化祭で、子どもたちは、キラキラ輝く自分を発見し、また大きく一步、前進することができたように思います。



最初に館長初め指導員による「マルマルモリモリ」のダンスがあり、会場は一気に盛り上がりました。その後、教室紹介、歌、ダンス、楽器演奏、手話ソング、ペープサート、フラッグダンスなど何日もかけて練習し、工夫をこらした楽しい出し物が発表されました。会場にはたくさんの方々の学校の先生や保護者、ボランティアの方々が来場され温かく見守って下さいました。

展示の部では、習字、紙すき、栽培した綿・絞り染め、手芸作品など、自然素材のものを生かしたり、廃材を利用したりして作った力作が勢ぞろいしました。



＜来場者の感想から＞

- 全員の力作に感動しました。分室ごとに個性があって、素晴らしい展示だと思います。（教員）
- とても感動しました。舞台上に立つということだけでも勇気があることだと思います。練習して発表できたことは自信につながったと思います。家や学校ではできない体験をさせていただいていることを、ありがたく思います。（保護者）

研修風景



異校種間体験・小中連携～15年研・5年研～

15年研では今年も、異校種間体験の研修を行いました。小学校・中学校・特別支援学校の中から、自分の所属とは異なる学校へ出向き、そこで1日体験をしました。また5年研では、今年から小中連携研修を取り入れました。小学校の先生は中学校へ、中学校の先生は小学校へ行き、それぞれ給食から放課後までの時間を参観したり、児童生徒と一緒に活動したりしました。この研修は、支援する児童生徒の過去や将来の姿を重ね合わせられることから、今の自分の立ち位置を知り自分の指導の仕方を見直すよい機会になったようです。

(受講者の感想から)

児童の元気な姿が印象的で、毎日楽しく登校してきている姿が想像できました。担任の先生の細やかでいいいな対応がとても参考になり、自分自身の授業に対する準備や生徒に対する心構えなど、初心にかえって取り組んでいかなければならないと考えさせられました。(小学校を体験した中学校教諭)

半日間ではありましたが、教師があれこれ指示を出さずに、生徒一人ひとりが考え動く姿を見ることができました。しかし、個性が強く現れる時期でもあるし、教師の言葉かけが難しいことも感じました。自主性を重んじていても、目は離さず、細かな変化を感じ取る力が大切だと感じました。(中学校を体験した小学校教諭)

初任者研修講座（会場校をお借りして）



学習指導・特別支援教育・道徳と特別活動・幼小中連携の研修では毎年会場校をお借りし、1日をその学校で過ごして研修をさせていただいています。今年は、倉敷南小学校・北中学校・倉敷支援学校・天城小学校・真備東中学校・葦高幼稚園・連島南小学校で研修をさせていただきました。会場校での研修は、実際に現場の様子を見せていただいたり、体験させていただいたりする中で、実践にすぐに直結する貴重な学びの場となっています。

(受講者の感想から)

「まず」「次に」「最後に」をうまく使うことで、言葉の式ができていたように思います。机間指導の際、一人ひとりの考えを受け止め、「どうしてそうしたの。」と尋ねることで、わけを説明できるように支援されていました。早速取り組んでみたいと思います。(小学校 学習指導の実際)

「笑顔の沈黙」「学校・学級は水槽だ」という校長先生、教頭先生のお話から、教師の生徒を受け入れる雰囲気づくりの大切さを学ぶことができました。「分かってくれる。見ていてくれる。」という安心感を与えることのできる存在に、私もなりたいたと思いました。(中学校 道徳・特別活動の実際)

担任の先生が、「自分のことはできるだけ自分でさせています。」と言われました。どこまでが必要な支援で、どこからがおせっかいになってしまうのかわからず、戸惑いました。しかし学級には視覚支援の工夫がたくさんされており、次にすることや手順がわかり、とてもありがたかったです。担任の先生は、温かくも厳しく子どもたちに接しておられ、そのやりとりはとても勉強になりました。(特別支援教育の実際)

子どもの「なぜ？」をととても大切にしたい授業だなと思いました。「なぜ？」から気付きにもっていき、さらにその気付きを何人かの児童に何度も復唱させていて、これが学力の定着につながっているのだと感じました。これから私も気付きにもっと重点を置いて授業をしていきたいと思いました。(小中の連携について)

幼稚園の先生方は、小学校入学後の子どもたちの戸惑いを少しでも少なくしようと工夫してくださっているとお聞きしました。私たち小学校教諭も、中学校入学後のことを見通して指導していくことの大切さを感じました。(幼小の連携について)